

「日本の家」 4

日本にレンガの家は必要か？

有名な日本の神社に、三重県の伊勢神宮があります。そこにある神社は20年に一回、壊して、隣に建て直します。何千年も前からずっと続けられているルールだそうです。わたしは、どうして壊して作り直すのか、ずっと不思議に思っていました。



伊勢神宮の中にはたくさんの神社があります。

右の神社は20年後、左の空地に建てられます。

実は、約1万年前の縄文土器も、1年に一度壊してもう一度作られていたそうです。もう一度、新しい命や新しい神様を受け入れるために、作り直しをしたといわれています。家も、同じ理由かもしれません。日本の器や家というのは、「生まれ変わり」、つまり、死と再生という大きな時間のサイクルの中に位置づけられているから、壊して作り直すのかもしれない。



縄文土器

日本の家と違って、西洋の家や教会は、れんがや石でできているものが多いです。そうした建物は何千年も残ります。つまり、永遠の時間の中に建物があるのです。日本の家は、神社のような、周期的に壊して建て直すものです。つまり、1年で季節が回って戻るように、回る時間の中に家を位置づけ、再生するのが、日本的な家のあり方なのです。町家は100年以上そのまま続くものも多くありますが、多くの場合、いくつかの部品を交換しながら、今の状態が続いています。



西洋の家なみ（イタリア）

また、日本は台風や大雨、大きな地震が多い国です。大きな災害があったとき、ほとんどの家は壊れてなくなってしまいますから、また作り直さなければなりません。しかし、木や紙でつくられた家は壊れても、すぐに直すことができます。そして、材料が軽いため、家が倒れても、家の中で死んでしまう可能性が低いです。

1995年、神戸で大きな地震（阪神淡路大震災）があったとき、たくさんの家やビルが倒れ、多くの人が亡くなりました。その時、日本の建築家の坂茂さんは、紙管（紙で作った棒）で教会をつくりました。紙でできた家や教会は倒れても重くありません。立て直すのも簡単です。

このように、日本の家が20年–30年くらいで価値がなくなって建て替えられるのは、神道の「生まれ変わり」の考え方の影響、そして日本の自然環境の影響があるのかもしれませんが、しかし、現在は交換の考え方だけが残って、部材が再利用されません。これでは、ごみが増えるばかりです。もし、環境を大事にして家を建てるなら、再利用できる材料でつくる、昔の日本の家づくりにもう一度戻った方がいいのではないのでしょうか。

ぜひ、新しいレンガの家を建てる前に考えてほしいと思います。

(986字)

(2020.12 Written by Makiko MATSUDA)



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。この作品を利用する場合は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例) 出典:「たどくのひろば」(<http://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use this work, please indicate the source as in the example above.